

スタディツアーで学んだ

教育の力と重要性

東京学芸大学附属国際中等教育学校 Miyu N.



はじめに

私は、教育に助けられた経験があります。小学生の時に渡米することになり、私は初めての海外で英語がほとんど話せず不安でいっぱいでした。しかし、学校のESLプログラム*のおかげで授業を理解できるようになり、友達もすぐにできてクラスやコミュニティに馴染むことができました。このように、私は日本とアメリカの教育を経験でき、それぞれの良さを感じ、学校がますます好きになりました。

中学生になって教育について調べているとき、カンボジアにはそもそも学校に通えていない子どもたちが多くいるということを知り、大変ショックを受けました。子どもたちの現状を実際に現地を見て、自分に何ができるのかを考えたいと思い、第8回高校生カンボジアスタディツアーに参加しました。

※ESLプログラム：英語を母語としない人を対象とした英語教育プログラム

寺子屋での驚き

私たちはシェムリアップ州のリエンダイ村にある寺子屋を訪問してきました。中途退学してしまった小中学生が復学できるよう支援する「復学支援クラス」と、昔学校に通えなかったため非識字者となってしまった大人たちが、仕事（主に農作業）後に読み書きを学びに来

る「識字クラス」を見学させていただき、実際に生徒の方たちと交流させていただきました。

①勉強に対する意欲

復学支援クラス・識字クラスにて「寺子屋に通えて嬉しいですか？」と質問したところ、全員そろって嬉しいと満面の笑みで答えていました。また、復学支援クラスでは寺子屋に何が欲しいかも聞きました。教室がとても暑かったため、私は冷房が欲しいのではないかと予想していました。しかし、生徒たちは図書室やサッカーゴールとボール、ギターなどが欲しいと答えていて、快適さを求めるのではなく、学びに直結するものを求めているように感じました。さらに、私たちは復学支援クラスの生徒たちと一緒に折り紙と扇子を作りました。私は折り紙を教えたのですが、言葉が伝わらないこともあり、一人一人教えていると時間がかかってしまいました。しかし、どれだけ小さな子どもでも決して怒ることなく、自分が教えてもらえる番が来るまでお手本を見ながら様々な折り方に挑戦していました。私は、寺子屋の生徒たちが日本の文化である折り紙にこれほど興味を持ってくれて、一生懸命に折ってくれたことをとてもありがたいと思いました。そして、これほど「学びたい」という意欲を誰かから感じたことは今までなかったと言って良いほど、寺子屋の生徒たちからエネルギーを感じました。

日本にいと、学校に行くことがあたりまえになってしまっていると私は考えます。そのため、学校に「行かされている」と感じる生徒も少なくないと思います。一方で、寺子屋の生徒たちは学校に通えなかった経験があるということもあり、「行かせてもらっている」という気持ちが強いように感じました。だからこそ、言語が通じなくても、学びに対する意欲をひしひしと感じられたのだと思います。



折り紙・扇子の文化を共有した様子

②放課後の過ごし方

復学支援クラスにて、放課後の過ごし方についても質問しました。すると、薪を割ったりお皿洗いをしたりと、家の仕事を手伝っていると答えた生徒が多く、勉強をしていると答えた生徒はいませんでした。日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所所長のお話によると、寺子屋では週3から4日ほど宿題は出るようですが、皆、家の仕事の手伝いの隙間時間に宿題

をしているそうです。また、特に衝撃的だったのは孤児院で暮らしている男の子の話です。彼は孤児院に帰ると、孤児院での仕事をしなければご飯がもらえないそうです。もし私が彼の立場だったら、寺子屋での勉強と孤児院での仕事の両立が大変で寺子屋をやめてしまうのでは？と思い、寺子屋に通い続けている彼に尊敬の念を抱きました。

私が小学生の頃は、「宿題が終わらなきゃ遊びに行っちゃだめよ！」と母に言われ、放課後は急いで宿題をして、残った時間で習い事に行ったり友達と遊んだりしていました。勉強する時間・遊ぶ時間が学校外にもあり、勉強・遊びに専念させてもらえる環境にいることはなんて幸せなのだろうと感じました。

また、それと同時に「教育」の幅の広さにも気づきました。私は今まで、教育の質が高いとは授業・教員・施設の質が高いということだと思っていましたが、それに加え「放課後の質が高い」ということも教育の質の高さに入るのではないかと感じました。自宅学習は学校で学んだことを定着させるために大切ですし、さらに友達と遊んだり習い事に通ったりすることはコミュニケーションスキルや協調性などを身に着けるために必要だと思います。カンボジアの子どもたちも、子どもの間、せめて小学生の時だけでも、勉強・遊びに専念させてあげたいと強く思いました。

③非識字者の苦悩

識字クラスの方たちに、読み書きができるようになったら何がしたいかを聞いてみました。私は、字が書けないと安定した収入を得られないことが問題だと思っていたので、新しい職を探したいと答える人が多いのではないかと予想していました。しかし、実際には「子どもに読み書きを教えたい」という声が多くて驚きました。特に印象的だったのは、全く読み書きができなかったときの生活を「まるで目が見えないみたいだった」と話す方がいたことです。非識字者は、文字で書いてあっても読むことができないために道がわからなかったり、薬の使い方がわからなかったりするそうです。私は、非識字者になると、就職だけでなく、日常生活にまで支障があることを知り、想像していた以上にこの問題は深刻だと感じました。

日本大使館の外交官の方によると、カンボジアの子どもたちが高校3年生まで進学する割合は45%以下だそうです。日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所所長に中途退学の理由を伺うと、もちろん貧困が原因で学校に通えなくなる子どももいるけれども、学校に馴染めないという理由で辞めてしまう子も多いそうです。非識字者を親に持つ子どもたちは幼少期に読み聞かせをしてもらえなかったり、学校で分からないことがあっても両親に聞けなかったりしてしまいます。すると、学校の授業についていくのが困難になってしまい、結局退学することになり、非識字者になってしまうそうです。そうすると、その子どもたちが大人になって非識字者の親となってしまい、負の連鎖を引き起こしてしまいます。

これらのことから、非識字者になってしまうと日常生活・次世代にまで悪影響が及ぼされることがわかりました。そして、非識字者がこれ以上増えないよう、対策していく必要があると強く感じました。



識字クラスの様子(左)とその子どもたちが外で遊ぶ様子(右)

日本・カンボジア関係の良さ

①日本語が喋れる！？

復学支援クラスのある女の子に日本語で自己紹介をされました。通訳の方に聞いてみたところ、今カンボジアでは日本語で自己紹介をする動画が SNS で流行しているそうです。さらに、その女の子に日本のイメージについて聞いてみたところ、「日本人は優しい。それに日本はとてもきれいな場所。いつか行ってみたい！」と答えてくれ、日本に対して良いイメージを持っていることがわかりました。

また、マーケット散策をした際にも、日本語で話しかけてくる店員さんが多くいました。「お姉さん、何が欲しいの？ズボン？Tシャツ？」などと話しかけてきて、日本人観光客に慣れている様子でした。プノンペン市街では、自動車メーカーをはじめ日本の会社の建物を多く見かけ、また日本のスポーツドリンクなどの広告も目にとまり、多くの日本企業がカンボジアへ進出している様子がわかりました。

②日本・カンボジア関係が良い理由

日本大使館の外交官の方に、日本とカンボジアの関係が良い理由をお聞きしました。1970年代、カンボジアでは内戦があり、それにより埋め込まれた地雷の撤去作業や、カンボジアの人たちのアイデンティティの一部であるアンコール遺跡群の修復作業などを日本は積極的に行ったそうです。また、この過程で「日本人がやってあげる」のではなく、「地元の人にやり方を教える」という手法をとったため、現在カンボジアはウクライナの地雷撤去事業を始めようとしているそうです。このように、日本はカンボジア内戦による被害からの復興において多くの支援を行い、それによりカンボジアからの信頼を得たということがわかりまし

た。

私は、日本が行った復興支援は、教育に通ずるものがあると思いました。やり方を「教える」ことは地元の人のためになり、次の世代にも継承されていくのだと、教育の大切さを改めて実感しました。



日本がアンコール遺跡群の修復に貢献した記録

おわりに

このカンボジアスタディツアーを通して、私はカンボジアの人々の学ぶ意欲・エネルギーに強く心を打たれました。そして、教育は今の子どもたちのみならず、次の世代の子どもたちの生活・人生にも大きく影響しており、大変重要であると感じました。

今の私にできることは、まずは一人でも多くの人に私が見てきたカンボジアの現状を共有することではないかと考えます。そうすることで、仲間を集め、皆でカンボジアへの支援を行っていきたいと思います。世界中の誰もが学校に通え、学ぶ機会が得られるために、自分は何ができるのだろうとこれからも常に考え、カンボジア、そして世界について自分自身も学びながら活動を続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、スタディツアーへの参加を応援し、協力してくださった学校の先生方、スタディツアーで学ぶ機会をくださった公益社団法人日本ユネスコ協会連盟及び公益財団法人かめのり財団の方々をはじめ、カンボジアスタディツアーに関わられているすべての方々、そして一緒に学んだ仲間たちに心から感謝いたします。